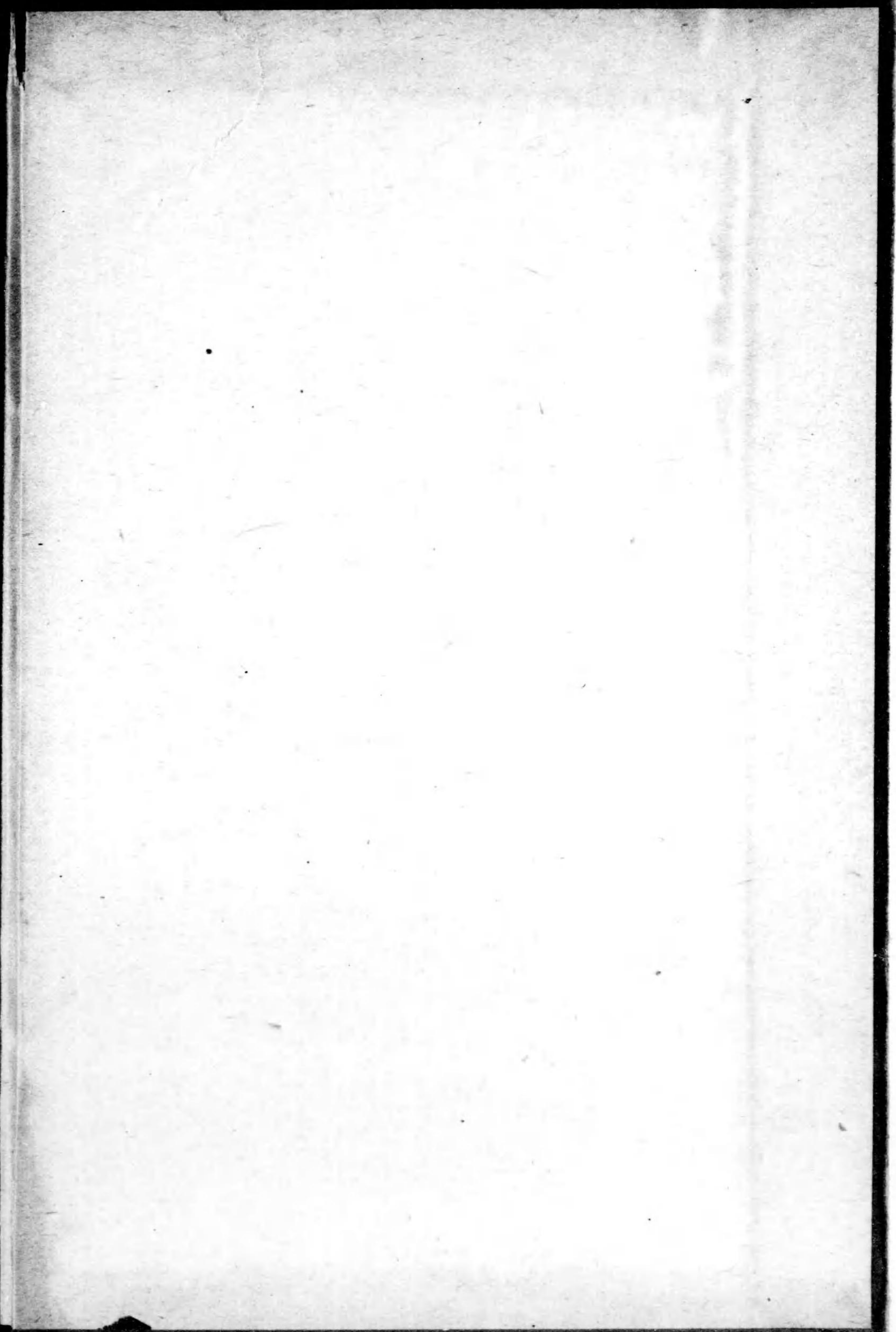
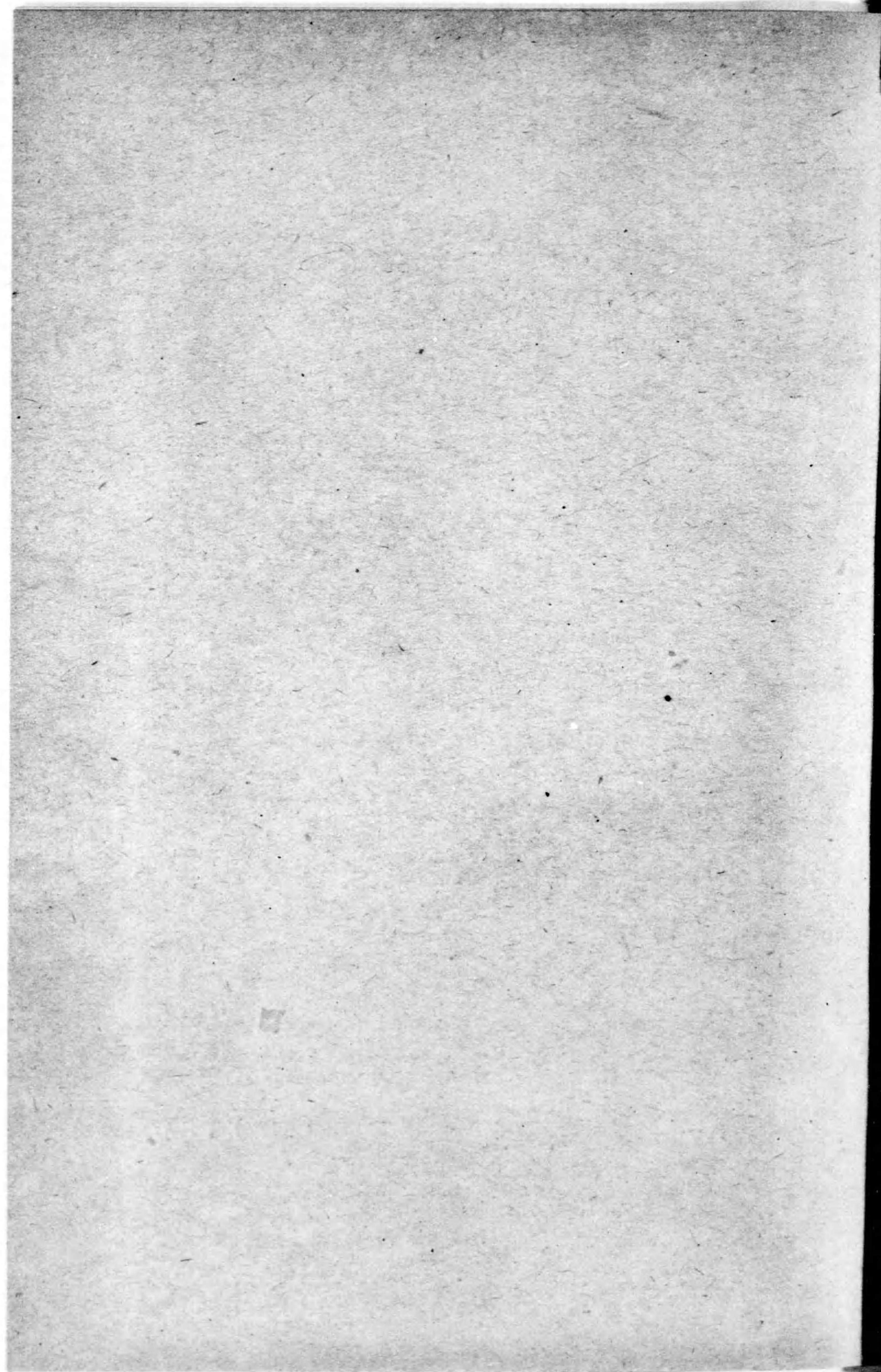
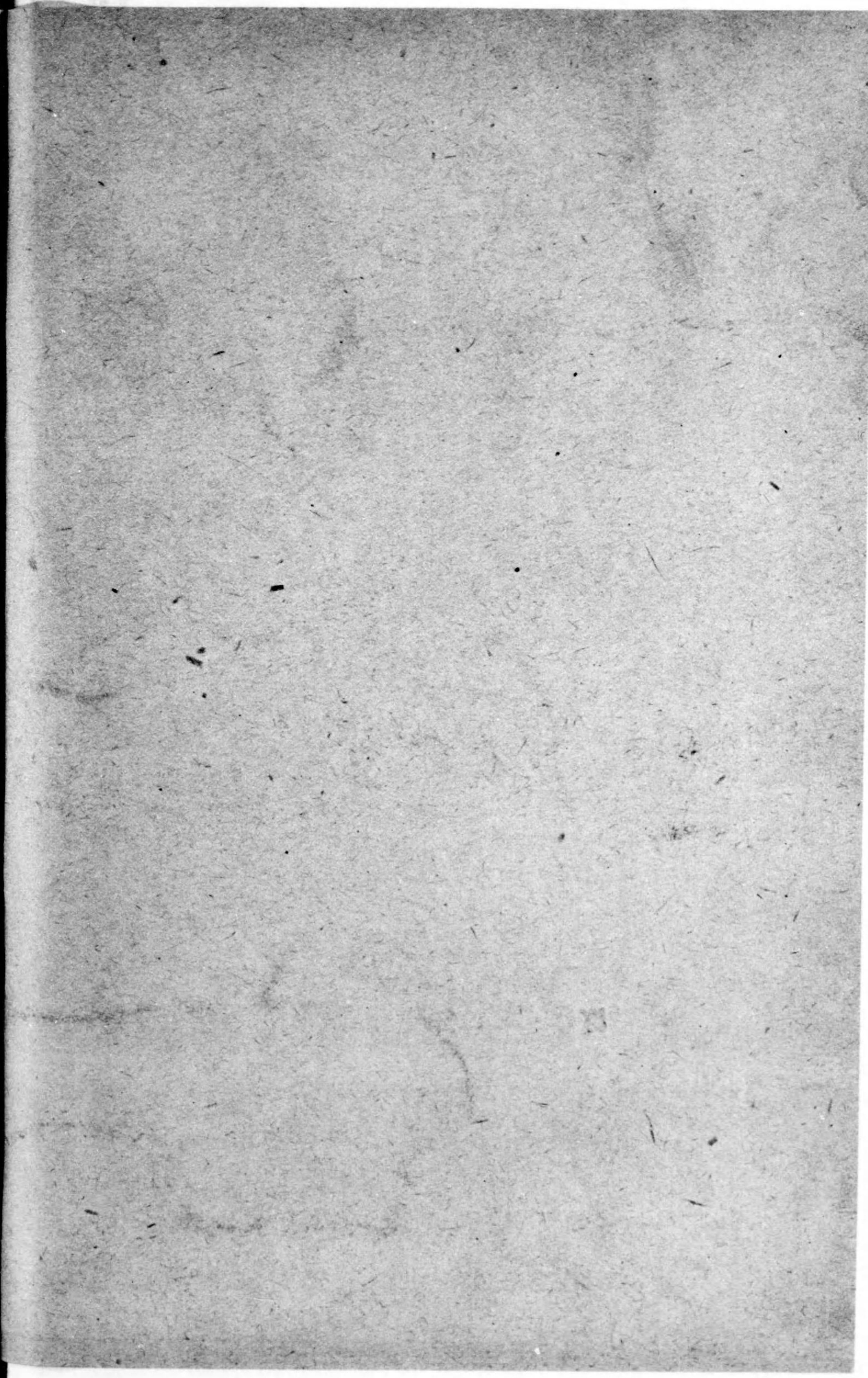
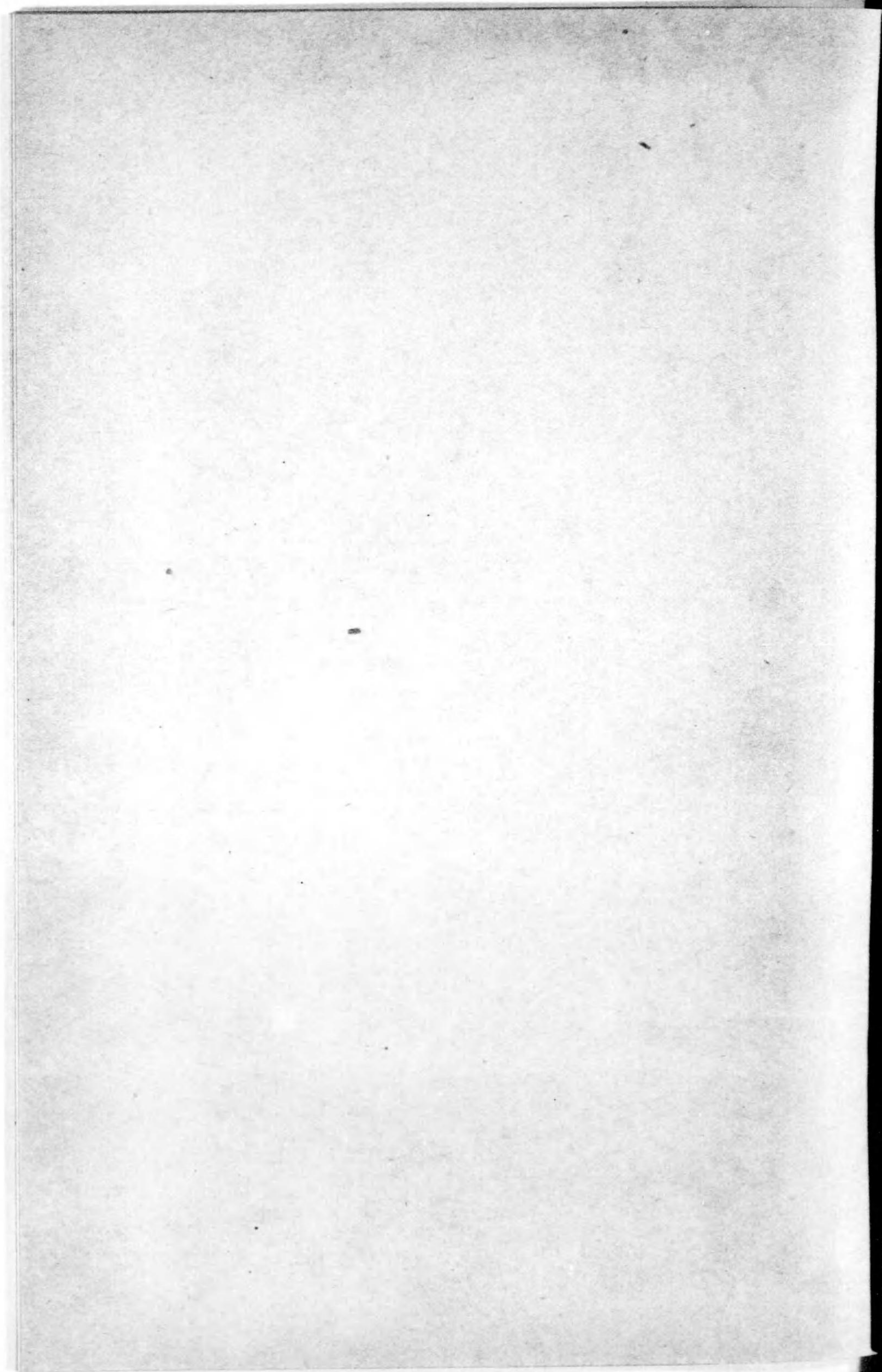


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>18</sup> 11 12 13 14 15

始







特106  
570



高野光吉印



目次

一九一〇年

失はれたるモナ・リザ (三)

生けるもの (七)

根付の國 (八)

一九一一年

畫室の夜 (三)

熊の毛皮 (四)

人形町 (二六)

甘栗 (二八)



庭の小鳥(三〇)

亡命者(三三)

鳩(三六)

食後の酒(三八)

寂寥(三〇)

聲(三四)

風(三九)

新緑の毒素(四)

癡顔者より(五)

「河内屋與兵衛」(六)

髪を洗ふ女(六二)

「心中宵庚申」(六三)

夏(六五)

なまけもの(六八)

手(七一)

金秤(七二)

はかなごと(七四)

めくり曆(七六)

地上のモナ・リザ(七七)

葛根湯(八〇)

夜半(八二)

けもの(八五)

あつき日(八七)

父の顔(八九)

泥七寶(九二)

ピフテキの皿(一二)

一九一二年

青い葉が出ても(二六)

赤鬚さん(二八)

あをい雨(三〇)

友の妻(三二)

——に(三三)

夏の夜の食欲(三四)

或る夜のこころ(三五)

おそれ(三六)

犬吠の太郎(三七)

さびしきみち(三八)

カフェにて(三九)

梟の族(四〇)

冬が来る(四一)

カフェにて(四二)

或る宵(四三)

夜(四四)

狂者の詩(四五)

郊外の人に(二九二)

冬の朝のめざめ(二九五)

カフェにて(二九九)

師走十日(三〇〇)

戦闘(三〇五)

一九一三年

人に(三〇四)

カフェにて(三〇八)

深夜の雪(三一九)

人類の泉(三二三)

山(三三〇)

よろこびを告ぐ(三三四)

現実(三四三)

冬が来た(三四三)

冬の詩(三四五)

牛(三六一)

僕等(三七二)

一九一四年

道程(二八〇)

愛の嘆美(二八二)

群集に(二八六)

婚姻の榮誦(二九三)



萬物と共に踊る(二九九)

瀕死の人に與ふ(三〇五)

晚餐(三二三)

五月の土壤(三二六)

淫心(三二〇)

秋の祈(三二四)

▽裝幀 内藤銀策氏△

一九一〇年

## 失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり

かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて  
「よき人になれかし」と

とほくはかなく、かなしげに

また、凱旋の將軍の夫人が偷視ねぞろの如き

冷かにしてあたたかなる

銀の如き顫音を加へて

まづやかに、つつましやかに

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

深く被はれたる煤色の假漆かじこそ

はれやかに解かれたれ

ながく畫堂の壁に閉ぢられたる

額ぶちこそは除かれたれ

敬虔の涙をたたへて

畫布エムにむかひたる

迷ひふかき裏切者の畫家こそはかなしけれ

ああ、畫家こそははかなけれ

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

心弱く、痛ましけれど

手に権謀の力つよき

晝みれば淡緑に

夜みれば真紅なる

かのアレキサンドルの青玉せいぎよくの如き

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

我が魂を脅し

我が生の燃焼に油をそそぎし

モナ・リザの唇はなほ微笑せり

ねたましきかな

モナ・リザは涙をながさず

ただ東洋の眞珠の如き

うるみある淡碧あわの齒をみせて微笑せり

額ぶちを離れたる

モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

かつてその不可思議に心をののき  
逃亡を企てし我なれど

ああ、あやしきかな

歩み去るその後うしろかげの慕はしさよ

幻の如く、又阿片を燻やく烟の如く

消えなば、いかに悲しからむ

ああ、紀念すべき霜月の末の日よ

モナ・リザは歩み去れり

(十二月十四日)

わが愛せし某樓の女を我假にモナリザと名けたりき

### 生けるもの

何事も戯たはむれにして、何事も戯ならず

戯ならずと言はむにはあまりに幼し

戯なりと言はば自ら悲し

我も生けるものなり

公園に散る新聞紙の如く

貧く、あちきなく、たよりなく

雨にうたるるまで

生けるものをして望むがままに生かしめよ

## 根付の國

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角で、名人三五郎

の彫つた根付の様な顔をして

魂をぬかれた様にぼかんとして

自分を知らない、こせこせした

命のやすい

見榮坊な

小さく固まつて、納まり返つた

猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはせ

の様な、のた鯉魚の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけら  
の様な日本人

(十二月十六日)

一九一一年

## 畫室の夜

暖爐ストーブの火は消えて  
 室の四すみよりいつとなく  
 寒さは電流の如く忍び入る  
 絹マントルの明るき光は瞬きもせず  
 物の色より黄を奪へり  
 亂雜なる畫室の様のもの淋しさよ  
 今もわが頭の中に微笑せる彼の人を思へば  
 繪具と畫布とは兒戯に近し

— 藝術は唯巧妙なる約束の因襲なるを —  
 むしろシャヴンヌの畫を嗤つて  
 一杯の酒リキールに泣かむとす  
 寒さ烈し

冬の夜の午前二時

(二月十二日)

## 熊の毛皮

熊の毛皮の心地よさよ  
なめらかに、さらさらと  
肌にあふる

その長き毛に頬をうづめよ  
その黒き毛に身をなげかけよ  
不思議なる歡樂は  
血管を走る可し

湯より出でたる女等を

こころみに熊の毛皮に伏せしめよ  
美しきものは  
更に生きたる光を得む

熊の毛皮の心地よさよ  
なめらかに、さらさらと  
肌にあふる

(二月十五日)



## 人形町

あの大丸も店仕舞をしたさうな  
 角の尾張屋の  
 大きなおろし小うり甘酒の行燈が  
 いま百八つの鐘の鳴り止んで  
 少しひっそりした  
 人形町にまだ見える

おもひなしが掃除の出来た

電車通りを歸つて來れば

横町に古風な白張提灯がひよつこりどー

何處かで鶏が啼く

(二月十五日)

## 甘栗

釜からあげた

清國名産甘栗の

やはらかい皮をむけば

琥珀の様な栗の實が

ころころところげたり

—みりんくさい湯氣がちる—

ワニラの酒リキタルに似た

舌つたるい甘さが

鬼の息のやうに體を包んだ

—氣の遠くなるやうな南清の大河

揚子江ヨウシキヤンの岸の白楊に日があたる

チャルメラの唄が

とほく、とほく—

よせば可いのに、その時

ころげた栗の實を

拾つて拭いて手にのせた

お花さんのいたづら

二月十九日

庭の小鳥

—つうい、ちろちろ—

何の小鳥か庭に来て  
めづらしい聲に啼く

—つうい、ちろちろ—

流暢なあゝの聲きけば

日本の鳥ではないさうな

二月十九日

## 亡命者

わが心は蝕<sup>せじく</sup>へり

うつろに、くろく、しんしんと

潮時來れば堪へがたし

かの亡命の日の淋しさに

身を隠したる家なれど

猫の背よりもうつくしき

黒髪をもつ少女等は

むざんなる力もて

ゐたりけり

女とは悪しきものの名なるかな

わがうつろなる心は

この名によりて痛し

女とはあやしきものの名なるかな

わがおびえたる心は

この名によりてをののけり

げに女こそ世にも悲しきものなれ

わがさびしき心は  
 この名によりて寂寥を極む  
 げに女こそ世にも呪ふべきものなれ  
 わがあたたかき心は  
 この名によりて、見よ凍らむとす

女よ

されど我に調伏の力なし  
 ただ哀れなる俳優のごとく  
 人知れず、ものの陰より  
 まづやかに、まどやかに

何時となく

舞臺を去らざるべからず――

わが心は蝕へり  
 静かなる夜も、しんしんと  
 潮時來れば堪へがたし

(三月十日)

鳩

鳩に豆やる、豆くへ、鳩よ

鳩が豆くふ、親鳩子鳩

馴れて吾が手に豆くふ子鳩

観音堂に夕日がさせば

鳩を見てさへ泣いたもの

(三月十日)

## 食後の酒

青白き瓦斯の光に輝きて  
 吾がベネチクチンの静物畫は  
 忘れられたる如く壁に懸れり

食器<sup>ビュッフェ</sup>棚の鏡にはさまさまの酒の色と  
 さまさまの客の姿と  
 さまさまの食器とうつれり

流し來る月琴の調<sup>しらべ</sup>は  
 幼くしてまかも悲し  
 かすかに胡弓のひびきさへす

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ  
 辛き酒を再びわれにすすむる  
 マドモワゼル、ウメの瞳のふかさ

(二月二十一日)

## 寂寥

赤き辭典に

葬列の歩調むり

火の氣なき暖爐ストーブは鑛山かみやまにひびく杜鵑つばきの聲に耳かたむけ

力士小野川の嗟嘆は

よごれたる絨毯の花模様はなもようにひそめり

何者か來り

窓のすり硝子すりびやうしに、ひたひたと燐りんをそそぐ、ひたひたと――黄昏たそがれはこの時赤きインキを過ち流せり

何處にか走らざるべからず

走るべき處なし

何事か爲さざるべからず

爲すべき事なし

坐するに堪へず

脅迫は大地に満てり



いつしか我は白のフランネルに身を捲き  
 蒸風呂より出でたる困憊を心にいだいて  
 玄きりに電磁學の原理を夢む

朱肉は塵埃に白けて

今日の佛滅の黒星を嗤ひ

晴雨計は今大擾亂を起しつつ

月は重量を失ひて海に浮べり

鶴香水は封筒に黙し

何處よりともなく、折檻に泣く

お酌の悲鳴きこゆ

ああ、走る可き道を教へよ

爲す可き事を知らしめよ

氷河の底は火の如くに痛し

痛し、痛し

(三月十三日)

## 聲

止せ、止せ  
 みじんこ生活の都會が何だ  
 ピアノの鍵盤に腰かけた様な騒音と  
 固まりついたパレット面の様な混濁と  
 其の中で泥水を飲みながら  
 朝と晩に追はれて  
 高ぶつた神経に顫へながらも  
 レッテルを貼つた武器に身を固めて

道を行く其の態は何だ

平原に來い

牛が居る

馬がゐる

貴様一人や二人の生活には有り餘る命の糧が

地面から湧いて出る

透きとほつた空氣の味を食べてみる

そして靜かに人間の生活といふものを考へる

すべてを棄てて兎に角石狩の平原に來い

そんな隱退主義に耳をかすな

牛が居て、馬が居たら、どうするのだ  
用心しろ

繪に畫いた牛や馬は奇麗だが  
生きた牛や馬は人間よりも不潔だぞ  
命の糧は地面からばかり出るのぢやない  
都會の路傍に堆く積んであるのを見ろ  
そして人間の生活といふものを考へる前に  
まづちつと翫味しようと思ひろ

自然に向へ

人間を思ふよりも生きた者を先に思へ

自己の王國に主たれ

惡に背け

汝を生んだのは都會だ  
都會が離れられると思ふか  
人間は人間の爲した事を尊重しろ  
自然よりも人工に意味ある事を知れ  
惡に面せよ

PARADIS ARTIFICIEL !

馬鹿

自ら害ふものよ

馬鹿

自ら卑むるものよ

(五月二十日)

## 風

はるばると椿の多い三宅島から

油壺のやうな黒潮を超えて

いい心持に

氣随氣儘な入つ當りさへさんざ爲て

はねて、けつて、とんで

とんで、躍つて

都へ渡つた南かせ―

さればさ

茨の刺の青むと一緒  
 通る女も、通る女も  
 みんな油くさくなつた

(五月二十一日)

## 新緑の毒素

——高尾清五郎君に呈す——

青くさき新緑の毒素は世に満てり

野といはず山といはず

街ちまたの垣根、路傍の草叢くさむら

置き忘れたる卓上の石の如き霸王樹に至るま  
 で

今は神経に動亂を起して

ひそかに廻る生の脈搏

狂ほしき命の力

止みがたき機能の覺醒に驚きつつ

溢れ出づる新緑を

その口より吐き出だしたり

青くさき新緑の毒素は世に満てり

生命の過剰

形を備へざる勢力

あかつき

鶏の觸神をそそりて

世にも不思議なる

かの鶏鳴を吐かしむる力

ありとある媚薬

ありとある香料も

いまだ此の力の避けがたきに及ばず

青くさき新緑の毒素は世に満てり

その味ひは直に人の肌を刺し

そのかをりはたちまち人の血管を襲ひて

我は此の時心臓の眩くらく重壓に堪へず

まかも、何事か絶叫せざるべからざる喜悅と驕

慢と來れば

手は新しく物に觸れ

足は雀躍こさしてただ前進せむとす

—されば、されば

苦しき忘我と

たのしき疼痛とは

地殻より湧き出づる精液の放射

物のすべてに染み渡れる此の奇臭に因りて痛

まし

青くさき新緑の毒素は世に満てり

姪みたる瘠犬は共同墓地に潜みて病菌に齒を

鳴らし

蛇は安らかなる冬の眠よりめざめて

再び呪はれたる地上に腹這ひ嘆かざるべから

す

二十日鼠は天井裏に交み

磯巾着は氣味悪き擬手を動かす

ああ、禽獸蟲魚

悉く無益なる性の昂奮に  
 虐殺と猜疑と狂奔とにいがみ合へり

青くさき新緑の毒素は世に満てり

見よ

河岸隨一の醜女ぶをんな

樽屋のおちかは溜息して

まろき乳首をまさぐり泣けり

見よ

宗林寺の納所坊主

青瓢箪の妙圓は朝の勤行に船をこぎ

門前の下駄屋に赤き鼻緒ををののき見つむ

見よ

大野屋の手代

四十男の佐太郎は

路地のくらやみに世にも始めて白鼠となれり

見よ

金庫を傾けて新しき紙幣の束を握り

上じやうき氣したる青女房は素足も軽く

間夫まぶの清人劉一章と廣東に走れり

見よ、見よ、見よ



青くさき新緑の毒素は世に満てり

家に入れど

臥床に入れど

沐浴すれど

にがき膽を嘗むれど

三味を聞けど

歌を聽けど

飲めど

泣けど

ともねすれど

まろねすれど

いづくまでも、いづくまでも

息ぐるしき辛辣のただよひは

我が身を包み、我が魂をとごろかす

あはれ、あはれ

青くさき新緑の毒素は世に満てり

(六月十一日)

## 癡顔者より

——バアナアド・リイナ君に呈す——

寛仁にして眞摯なる友よ

わが敬愛するアングロ、サクソンの血族なる友

よ

君のあつき友情を思へば余は殆ど泣かむとす

めづらしき夕立の

チエルジイを襲ひて白き烟を上げたるかの日

余は初めて君の手を握れるなりき

寛仁にして眞摯なる友よ

君は余に圖り、余を信じて

運命の如く

遠きわが日本に何物をか慕ひ來れり

ああ、やがて其は三年にもなりなむ

友よ

君は常に燃ゆるが如き心を以て余に向へるに

余は狐の如く、また鼯の如く

君の心を側かたへに置きて

醜惡なる生活に身を匿せり

西に奔り、南に走せ、復りては又往きつつ

寛仁にして眞摯なる友よ

君は静かなる深き瞳に物を思ひて

余の爲に悲しみたり

おのづから消えゆく寫眞のたよりなき悲しみの如く

落つる花の詮なきごとく

ゆく雲の止みがたきを思ふごとく――

櫻さき、廣重の水の流るる日本にして

友よ

君はいかに淋しかりけむ

君の結婚と愛兒の誕生との間にも

君が眉のあたりには尙ほ何物か潜みたりき

君はつひに怒らず

またあきらむる事をせず

疲れたる余を見ては

チエルジイに於けるが如く今も語る

寛仁にして眞摯なる友よ

君は知りつくし給ふならむ

余の悲しさの極まれるを

余の絶望と、余の反抗と  
 余の不満と、余の奮勵との  
 つねに矛盾し、つねに争闘して  
 余を困憊せしめ  
 さらに寂しき涙に誘ひ行くを  
 余のまことに不倫なる自暴自棄の心を懐ける  
 を  
 また理不盡なる難題に  
 解くべからざる結繩に  
 自らを苦しむるを  
 人として最も卑しき弱き心

直に極端を思ひ  
 ともすれば非常事に走する心の  
 余に藏かくれたるを  
 去かれどもまた  
 君は知りつくし給ふならむ  
 いかにして斯かるかを  
 寛仁にして眞摯なる友よ  
 憤りは余に苛責を加へたり  
 ニルヴナの花はあとを留めず  
 軒を見れども青き鳥は啼かず

君に故郷あり

余に故郷なし

余は選ばれたる試みの世界に

最も弱きものとして生れたり

余は、むしろ、余の贅澤に似たる苦痛

この我執ある懊惱を憎む

友よ

余を目して孤獨を守る者となす事なかれ

余に轉化は來る可し

恐ろしき改造は來る可し

何時なるを知らず

ただ明らかに余は清められむ

友よ

余は再びチェルジイに於けるが如く君の手を

握らむが爲に祈る

(六月十四日)

## 『河内屋與兵衛』

夜があけて眼がさめると

妹の菫若もほんのりと顔を上げる

大阪の油屋……

窓に日がさし

脚燈フットライトがためいきすれば

暗い見物は半ば口をあけ

咲きかけた睡蓮の心もちで黙つて見つめる

道具うらでとんと躓つまづく音

波紋のやうに静かな舞臺の顫慄

さんたまりや

無頼の随一

河内屋與兵衛のあこがれこそ悲しけれ

丁髷太きごんふあんの眼まなここそ痛はしけれ

左團次の獨白に銀の雨亂れかかり

魂ぬけてふうわりと

糸にひかるるや

長崎へ

くるりごの音さへ狂ほし  
あれ、蕤若も長崎へゆく

長崎へ

さんたまりや、さんたまりや

## 髪を洗ふ女

水道の水は止め度もなく

あの人の金使ひに似て流れる

洗粉の手ざはりつめた

返した人の後姿がなせか  
まよんぼり氣にかか  
る

風呂にただよふ名も知れぬ  
ほのかな匂ひは

たよりないよな、あるやうな

ついこのごろの、されば、人のそぶりか

むしやくしや腹に髪を洗へば  
 髪さへ瘦せて櫛もすべりぬ  
 大河で鳴る汽船の笛が  
 ふいと消えればごうやら涙が  
 ごうやら涙がにじみ出す

わが幻覺のあやしさよ  
 濱町河岸の夏のあさ

(—)

### 『心中宵庚申』

死んでも去りは仕りませぬと  
 立派に誓言しやつた仁左衛門が  
 あれ、去り状を書く  
 女房のお千代ごのに—

ちつと噛みしめたふところ紙を落して  
 思はず驚く成駒屋の顔  
 梅雨の夜風が何處からか吹いて来て



ちよぼでは、わつと泣き落す

ふるい、ふるい人情の烈しいひかりが

もののかげから忍んで泣く

死ぬるは切ない美しさ

今の世でも

( — )

## 夏

夏になればじとじと

梅雨つにまめつた夜具蒲團

桐の箆筒の着物から

モロツコ革の詩集まで

くわつと照り出す暑い日の

温うん氣きに蒸いれて、それ、燐りんの香かのする

青い、けうとい、ものものしい

微ひが這ひつき花はなが咲く

夏になればてらてらと  
 屋根の瓦が照り返し  
 入道雲も上のほせつつ  
 うろん臭げなうす笑ひ  
 物もうごかぬ眞ま白ひる晝まに  
 いきり立つ水氣の憎さ  
 やがてつもれば、どうせ不祥な  
 雷かみじりさまがわめき出す

夏になればすばすばと  
 ふかす烟草もあぢきなく

烟管なげ出しぢれついで

つい有り合ひの、處きらはぬ難題に

男困らす人の癖

きりきりと噛む貝殻の

音がこたへて詮もなく

玄ん底夏には身をそがれる

そのまた夏が来るのかね

(六月十三日)

## なまけもの

浅草は

雷門のよか樓の晝のけうとさ

ひろびろと静かな二階の

白い食卓には斜に並木の新緑がまみ

栗色のリノリアムは足もとで微かな弾力にさ

さやき

狂つた時計は六時を指す

霧島つつじの眞赤なかげに

サツボロの泡をみつむる

モトモワゼルもねむたし

三階にだるい稽古の細棹

その糸につれてそつととうつ足拍子も

いつか止んでものみなねむたし

なまけものはベネダクチンをなめて

過ぎゆく時のゆるやかなテンポをたのしみ

ここに基督の禁をやぶる

ぼんやりとした春の末

観音さまに程近い  
美人料理の晝のけうとさ

さてもその時ふいと聞えるものの聲

「雷門の定見世で

とんだりはねたり變つたり、やれな」

（六月十五日）

## 手

わが手を見ればうとまし

昨日病院の白き部屋に見たる

かの瓶詰の手と

さまで變らずなまなましきものを

手のみかは……

（——）

金秤

アルミニウムの金秤きんばかり

上二匁の分秤

風もないのにちりちりと

日がな一日ふるへては

休む瀬のない氣のくばり

白くまぶしいモルヒネが

ひらりと乗れば金秤

胴ぶるひして身をたふす

夏のさ中にいじらしい

アルミニウムの金秤

( )

はかなごと

ついで言ひ出したことはなけれど  
 言ひ出さねばわからぬものか  
 言ひ出さぬままに  
 いつしか過ぎぬれば  
 むかしの思は夢のやうにて  
 唄のやうにて  
 ころにかかつた名も知らぬなやみは  
 薄いほくろか、ほろりと取れける

さびしや

( | )

## めくり曆

めくり曆のさびしさよ  
 昨日も今日も裂いて取る  
 あすもあさても裂いて取る  
 裂いてつきればお正月  
 裂いてつきるはよけれども  
 かうして棄てた紙屑に  
 さてもよくよく似た女—  
 めくり曆のさびしさよ

## 地上のモナ・リザ

モナ・リザよ、モナ・リザよ  
 モナ・リザはどこしへに地を歩む事なかれ  
 石高く泥濘ぬかるみふかき道を行く  
 世の人人のみにくさよ  
 モナ・リザは山青く水白き  
 かの夢のごときロムバルディアの背景に  
 やはらかく腕を組み、ほのぼのと眼をあげて  
 ただ半身をのみあらはせかし

思慮ふかき古への畫聖もかくは描きたりき  
 現實に執したる全身を、ああ、モナ・リザよ、示すな  
 かれ

われはモナ・リザを恐る

地上に放たれ

ちまたに語り

汽車に乗りて走るモナ・リザを恐る

モナ・リザの不可思議は

假象に入りて美しく輝き

咫尺に現じて痛ましく貴し

選擇の運命はすでにすでに余を棄てたり

余は今もただ頭をたれて

モナ・リザの美しき力を夢む

モナ・リザよ、モナ・リザよ

モナ・リザは永しへに地を歩むことなかれ

(七月六日)



## 葛根湯

かれこれ今日も午といふのに  
 何處とない家の中の暗さは眼さめず  
 格子戸の鈴は濡れそぼち  
 衣紋竹はきのふのままにて  
 窓の外には雨が降る、あちら向いて雨がふる  
 すぎない心持に絶間もなく――  
 町ちやちらほら出水のうはさ

狸ばやしはやうなものひびきが  
 耳の底をそそつて花やかな昔を語る  
 膝をくづして  
 だんまりの  
 銀杏返しが煎る薬  
 ふるい、悲しい、そこはかさない雨の香に  
 壁もなげいて息をつく  
 何か不思議な  
 何か未練な湯氣の立つ  
 葛根湯の浮かぬ味

(七月七日)

## 夜半

白の毛布につつまれしギョロンセロは  
 あつくるしき其の低音に汗ばみ  
 油ぬりたる瓦斯の開閉器は  
 忍び出づるすすごい臭氣に色青ざめ  
 隣りの尨むぎは氣狂ひのごとく  
 くらやみの空に吠えかかる

下水に捨てし魚の腸わたの腐りゆけば

わが眼はねごこの中に痛みつかれて  
 山椒のごとき昂奮に神経はののしる  
 ひしあつき夜は玄くじくと  
 痘瘡やみの乳牛のくるしみに似たり  
 ふとおそろしき欲望は筋肉をひきつり  
 電流に似たるやるせなき衝動は  
 胸ををどらせ  
 こころは謀計はかりごとをめぐらして  
 にくき微笑をもらす

四十にちかきふとりじしのをんなは  
 絞らまほしき脂肪に銀いろのおしろいを塗り  
 あかごの首のごとき乳ぶさに  
 わきがのまほらしく  
 兩あしを投げ出して  
 息なやましき若者の幻覺を責めさいなむ

七月の風なき夜半の  
 わが官能の泣きわらひ

(七月八日)

けもの

けものをんなよ  
 限りのない渴望に落ちふけるをんなよ  
 盲人のまつこさを以てのしかかるをんなよ  
 海蛇のやうにきたならしく  
 ぬかるみのやうにいまはしいをんなよ  
 けれど、かなしや  
 お前をまたも見にゆくのは  
 さばかりお前がけものなるゆゑ

いまはしいゆる

(七月八日)

あつき日

ぢりぢりと啼きかけてはまた  
何か憚かる初生うぶな小膽な油蟬

赤い斑點が大きな檜の木の葉に  
寶石のやうな空の碧い深みに  
まぶしい人の顔にすだれの奥に  
氷屋の店に、まつかな斑點が  
てらてらと、ざらざらと――

東京の場末の青物市場には玉葱がむせ返り  
 蟻子はただれた馬の腹にすひつき  
 太陽は薄い板のやうなものにて  
 わが横面をびしりとうつ

肉からえみ出す汗をふいて  
 木の根に休めば石炭酸の冷笑ぞ氣味わるき

(———)

## 父の顔

父の顔を粘土にてつくれば  
 かはたれ時の窓の下に  
 父の顔の悲しくさびしや

どこか似てゐるわが顔のおもかげは  
 うす氣味わるきまでに理法のおそろしく  
 わが魂の老いさきまざまざと  
 姿に出でし思ひもかけぬおごろき

わがこころは怖いもの見たさに  
 その眼を見、その額の皺を見る  
 つくられし父の顔は  
 魚類のごとくふかく黙すれど  
 あはれ痛ましき過ぎし日を語る

そは鋼鐵の暗き叫びにして  
 又西の國にて見たる「ハムレット」の亡霊の聲か  
 怨嗟なけれど身をきるひびきは  
 爪にまみ入りて瘰癧の如くうづく

父の顔を粘土にて作れば  
 かはたれ時の窓の下に  
 あやしき血すぢのささやく聲……

(七月十二日)

## 泥七寶

ちらちらと心のすみに散りしくは  
 泥七寶か、眼に見えぬ  
 羽蟻の羽根か、ちらちらと  
 掃きすつるもいとほし

家を出づるが何とてかうれしき  
 夜よになれば何とてか出づる  
 ごうせ夜更けにうなだれては歸るものを

きりきりと錐をもむ  
 用はなければ錐をもむ  
 錐をもめば板の破るるうれしさに

もらつた人形をかへすもよし  
かへしても人の受け取らぬが定じやうならば

それと知つてあちら向く  
顔にふうわり日がさせば  
あの根がけさへ棄てたげな

かなしや人はみな情をば賣る  
口のさきにて賣る  
あれもこれも  
恐ろしき舌をかくして賣る

つくづく見れば厭な顔  
家で思へば好いた顔  
髪の黒さよ



われは氣違ひぞとよ  
 夢みるゆるゑに氣違ひぞとよ  
 おもふこと取りとめなければ  
 悪しきこと人の前にて言へば  
 おのが繪をも破り  
 友をも罵り  
 わきてみづからを輕しむる故に  
 われは氣ちがひぞとよ

長き睫毛の反りかたも  
 人が人に似たればなつかし  
 ふと異國の言葉を語れよかし

生れてより眼に見えぬただ一人を戀ふ  
 さまざまの人を慕ひて  
 ただ此の一人の影を追ひける

女よ、高ぶるなかれ。

高ぶる値あたいあればこそ高ぶるなかれ  
いかなる男かその値あたいを非なませむ

讀みてゆけばつねのこと  
ただならず見えし君の手紙も

知らぬ顔のうまき少女よ

いまひと足なれば

知りて驚かぬやうなれかし

酔へる人のうつくしさよ

酔へる真似する人の醜みにくさよ

カフエの食卓ぞ滑稽なる

八重次の首はへちまにて

小雛の唄は風鈴にて

さてもよ、がちやがちや虫の籠は

「プランタン」てね、轡蟲の竹の籠

女の涙をののしりて

酔を男の

卑屈なる武器とはおぼし給はぬにや

いと賤しき武器とは

人ごみのおもしろや

兎も角も君をふり返り見る人の多ければ

浅草の仲見世

たてひき知らぬ人に

雨ふりそぼちうなだれ、酒も冷えぬる

おもしろや

かの人にくるしむは

くるしみをかくすそぶりよの

淋しい顔はせまいよ

ひとりものの癖と

人の言ふよ

兩國橋の橋の上

白のかすりに古袴

三十ちかい鹿馬ものの

柄にないよなふさぎかた

。 われをなげけとてかひや酒  
 つりし蚊帳のみづいろに  
 品川の夜の玄ののめ

。 「勝てば官軍」ほれたが因果  
 馬鹿で阿呆で人様の  
 お顔に泥をばぬりました

。 妻もつ友よ  
 われを骨董のごとく見たまふなかれ  
 ひとりみなりとて

。 月さへいでて  
 君の手のつめたきに  
 海の潮うしほの鳴ることよ

弱きは女のならひとは  
一重櫻が風にちる  
ちつたあとでの申しわけ

たどひ離れて目には見ずとも  
おもつて居ればうれしいと  
女はこんなへまをいふ

それでみんなかもうそれだけか  
それであなたのてれんてくだの種たねざれか  
まこととかいふ怪ばかものの  
まつぼの出たのを御覽じろ

さきがさきなら  
こつちもこつち

泣けば蜂さへ面おもてをさす  
もつて生れたぬうぼうで  
ちよちよんがよいやさど切れて来た

ひとりものは  
ひらひらと  
風にとぶよ  
雨にぬれるよ  
さびしく

腕をくんで考へる  
渡舟に月がさす  
月が冴えれば氣がめいる  
水は流れて渦をまく

腹をたつたむかしもあるに

わらつてすます今日の身  
もうおしまひのわれか

(七月—翌年六月)

ビフテキの皿

さても美しいビフテキの皿よ

厚いアントルコオトの肉は舌に重い漿汁プレキイにつ  
つまれ

ボンム、ド、テルの匂ひは野人の如く卒直に  
軽くはさまれた赤ラディシユ大根の小さな珠は意氣なポ  
ルカの心もち



冴えたナイフですいと切り、銀のフオオクでぐ  
とさせば

薄桃いろに散る生血

こころの奥の奥の誰かがはしやぎ出す

マドモワゼルの指輪に瓦斯は光り

白いナプキンにポルドオはまみ

夜の壓迫、食堂の空気に満つれば、そことなき玉  
葱オニのせせらわらひ

首祭りに受けて飲む血のあたたかさ

皿をたたいて

にくらしい人肉をちつと噛みしめるこころよ  
さ

白と赤との諧調に

シユトラウスの毒毒しいクライマックス

見よ、見よ、皿に盛りたるヨハネの黒血を

銀のフオオクがきらきらと

君の睫毛がきらきらと

どうせ二人は敵同志、泣くが落ちぢやえ

ナイフ、フォークの並んで載つた  
さても美しいビフテキの皿よ

(十月十五日)

一九一二年

## 青い葉が出ても

はなが咲いたよ  
 はなが散つたよ  
 あま雲は駆けだし  
 蛙<sup>かゝる</sup>は穴からひよつこり飛び出す  
 やあれやあれ  
 はなが散つたよ  
 青い葉が出たよ  
 青い葉が出ても

とんまな人からは便りさへないよ  
 女だてらに青い葉が出ても  
 やあれ青い葉が出ても  
 ちよいと意地を張つたよね

(六月十一日)

## 赤鬚さん

赤鬚さん、赤鬚さん

あなたの眼玉はなせ碧い

あなたのお鼻はなせ高い

あをい眼玉に眼鏡をかけて

たかいお鼻に玉の汗かいて

明治初年の一枚繪のやうに

鶴首つんだし

何見てまはる

赤鬚さんはなつかし、をかし

遠く、はるばる、とつとの奥を

夢の奥からちつと見てまはる

あをい眼玉の赤鬚さん

舌は廻らずとも氣のわか

さてもまた生きまじめな赤鬚さん

(六月十一日)

## あをい雨

誰か待つてゐる

私を待つてゐる、私を――

誰かゑらぬが待つてゐる、何處かで  
ぬれゑよぼたれて、私を――

きりのない雨の音もぢれつたいが  
ほんとに誰だらう私を待つてゐるのは  
誰だらう、ほんとに

おや

まつさをな雨の中で

微かに顫へて吐息する森の中で

暗い若葉の陰にゑくしく泣いて

ぬれゑよぼたれて

私の名を呼んでゐる

若い女の人――

若い眼の大きい女の人

警察の分署ではだかにされて

髪の毛を振りみだしてもがきながら

呼んでゐる、私を――

ああ、行く、行く  
 たどへ責め折檻されても  
 私の行くまできつと我慢おし  
 白状した花井お梅が待つてゐる  
 寄席で、大川端で  
 そして  
 ミステリアスな南米の花  
 グロキシニアの花弁の奥で  
 薄紫の踊子が、<sup>フロライエ</sup>樂屋の入口で  
 さう、さう  
 流行の<sup>ハヤ</sup>小唄をうたひながら

夕方、雷門のレストオランで  
 怖い女將<sup>おかみ</sup>の眼をぬすんで  
 待つてゐる、マドモワゼルが  
 待つてゐる、私を—  
 けれど、この雨のふりやうは  
 雨雲がでんぐりがへしでも打つた事か  
 何しろ、遠いとほい  
 事によつたら此の世でない程とほい處で  
 待つてゐる、待つてゐる  
 エルハアレンも、ドナテロも、デュウゼも  
 それからマリイ、アントアネットも

佛御前も、ヒルダも  
 長い睫毛の人も  
 待つてゐる、待つてゐる、私を――  
 それなのに  
 ああ、ちれつたい雨の中で  
 誰が何處で待つてゐるのだらう  
 こんなみそぼらしい野蠻な私を――  
 空を見てゐると  
 にくにくしい雨雲のもつと上の方に  
 何かが居る  
 もし一度でも見たら

この胸がせいせいしてしまふやうな  
 安心して寄りかかれるやうな  
 そして私まで自由自在な不可思議力を得られ  
 るやうな  
 貴い、美しい、何かが居る  
 そして私を呼んでゐる  
 けれど一體私はどうしよう  
 分署へも行かなければならないし  
 雨は降るし、まつさをな雨はふるし  
 それなのに  
 誰か待つてゐる

私を待つてゐる、私を――  
 誰か知らぬが待つて居る、何處かで  
 ぬれまよぼたれて  
 私を――

(六月二十一日)

## 友の妻

友よ

君の妻は余の敵なり  
 君の妻を思ふたびに、余の心は忍びがたき嫉妬  
 の爲に顛へわななく  
 君を余より奪ふものは君の妻にして  
 君に對する余の友情を滑稽化せむとするもの  
 も君の妻なり  
 さればすべての友の妻は余の呪ふところとな



る

友よ

曾て獨身者なりし友よ

君はつひに

いまだ其の毒手に禍ひせられざりし日を想ひ

起す事あたはざるべし

今、君の眼は妻の眼によりて世界を見

君の心は妻の懐ふところにありて初めてまことに安ら

かなるにあらずや

友よ、偽善と偽悪とを口にする事なかれ

君は到底その妻の奴隷となり終れるなり

余は知る

その妻を稱ふる友の淋しき眼まなこの色と

かなしき唇の微顫とを

又余は知る

その妻を罵る友の卑怯なる第二思念と

富限者の粗衣に似たる驕慢の表情とを

余は此れを見、此れを知るが故に

友よ、偽善と偽悪とを以て余の友情に臨む事な

かれ

友よ

君の妻はあらゆる好言と粉飾せる媚態を以て余に接し

余を遇するに殆ど君に對すると同じき好意を見す

まかして

一介の婦人は君の妻なるの故を以て

余に不當の尊敬と懸念と好意と友情とを強ひむとす

友よ、友よ

君の妻は君に對する心を標準として君の友を

量る

君の友は何故に此の不當の心に與り知る事を得む

君の妻は、見よ、君を虐<sup>しみた</sup>げて脚下に君を保留すると共に

君の妻は、また、敵に對する楯として君を用ゐむとす

右にせよ、左にせよ、傷くものは、友よ、君なり

まかして、ひとり惱まむとする者は余なり

友よ、君は明らかに君の妻に没頭すと言ふに若かず

君が妻を得し時は我等の友情に水のさされたる時なり

友よ、悲しけれども君の余に對する友情は贅澤に類す

玄かして、良妻賢母は贅澤を忌むこと男根の弱きを忌むよりも甚し

余は君のあはれなる捕虜の姿を見て苦笑すれども

君は尙ほ何事もなき顔を作りて余に向はむとするか

友よ、それは盲目もうもくに向つて爲すべき事なり

君は妻の爲に包まる

妻は君の城廓なり

友よ、君はむしろ安らかに其の城廓のうちに嗜

眠せよ

友情とは例へば君の妻の耳のうしろなる黒子ほくろの如し

妻の後ろ向く時のみ眼に明らかに見ゆ

友よ、その故に余は絶望せむとするなり

友よ

君の妻は性の力を有す

何ものか此れに敵し得む  
されば

人生の最も深き興味あり、最も大なる意味を有

するたのしき忘我の瞬間は

常にある境遇にのみ起る

君の友の如きは此の時塵埃の如し

君は此の莊嚴なる事件の面前にあつて

平日の友情と稱するものを思はば

殆ど滑稽に近き不自然を笑はざるを得ざらむ

友よ

曾て獨身者なりし友よ

君は今すべてを忘れてたり

われらが友情の寶玉にも比すべかりしを

われらの心の曾ては裸體のままなりし事を

それもよし、友よ

絶望は謙讓に似たり

余は唯小笠原の禮にならひて

三步の距離を保たむのみ

されど

友と共に一しんを分つ友の妻のねたましさを

忘かして又

價值なきものに魂を委ぬる友の運命のかなし  
さよ

友よ

偽善と偽悪とを口にする事なかれ  
余はすべてを知る

いかにその假裝の巧みなりとも

到底君の妻は余の敵なり

是非なけれども

打ち勝ち能はざる余の敵なり

(七月二十一日)

に

いやなんです

あなたのいつてしまふのが――

花よりさきに實みのなるやうな

種子よりさきに芽の出るやうな

夏から春のすぐ来るやうな

そんな理屈に合はない不自然を

どうかしないでゐて下さい

型のやうな旦那さまと

まるい字をかくそのあなたと

かう考へてさへなせか私は泣かれます

小鳥のやうに臆病で

大風のやうにわがままな

あなたがお嫁にゆくなんて

いやなんです

あなたのいつてしまふのが――

なせさう容易たやすく

さあ何といひませう――まあ言はば

その身を賣る氣になれるんでせう

あなたはその身を賣るんです

一人の世界から

萬人の世界へ

そして男に負けて

無意味に負けて

ああ何といふ醜惡事でせう

まるでさう

チシアンの畫いた繪が

鶴巻町へ買物に出るのです

私は淋しい、かなしい  
 何といふ氣はないけれど  
 恰度あなたの下すつた  
 あのグロキシニアの  
 大きな花の腐つてゆくのを  
 見る様な  
 私を棄てて腐つてゆくのを  
 見る様な  
 空を旅してゆく鳥の  
 ゆくへをちつとみてゐる  
 様な  
 浪の碎けるあの悲しい  
 自棄の  
 ころ  
 はかない、淋しい、  
 焼けつく様な  
 —それでも戀とは  
 ちがひます

サンタマリア!

ちがひます、ちがひます  
 何がどうとはもとより  
 知らねど  
 いやなんです  
 あなたのいつてしまふ  
 のが—  
 おまけにお嫁にゆくな  
 んて  
 よその男のころのまま  
 になるなんて

(七月二十五日)

## 夏の夜の食慾

日が落ちて、ばたりと世界が暗くなれば  
夏の夜のうれしさは俄かに翼をひろげ  
晴れた璃瑠色の星天さへ氣まぐれきつて燥ぎ  
出し

何喰はぬ顔の下からべろり、べろりと舌を出す  
私の魂はこの時、四足獣のむかしを忍び  
曾て野にさまよつて餌を求つた習性を懐かし  
み

又、闇黒の喜びにふるへ  
秘密、疾走、破壊、飽滿の慾に飢え渴く

「ぬき一枚——やきお三人前——御酒のお代り……」  
突如として聞える蒲焼屋の澁團扇  
土用の丑の日——

「ねえさん、早くしてくんな、子供の分だけ先きに  
してくれれや、あとは明日の朝までかかつて  
も可いや、べらぼうめ」

「どうもお氣の毒さま、へえお誂へ——入らつしや  
い——御新規九十六番さん……」



眞赤な火の上に鰻がこげる、鰻がこげる

胃は晝間の疲をやや恢復し

頻りに酸液を分泌すれば

中清の天麩羅の下地にセザアル・フランクの夜

曲を味ひ

又、ほごよく黄いろい衣の色はマネエの「鸚鵡の

女」を思はせる

けれど、暫時がうちに

食慾は廢顔する

たちまち

何か噎せるやうな魂の眩暈

むしろ嘔吐

支那蕎麥、わんたん、ふうよんたん

人造牛酪マルガリンはソオスパンに焦りつ  
き

ひそかに美人を賣る

淺草の洋食屋は暴利をむさぼつて

ピフテキの皿に馬肉を盛る

泡のういた馬肉の繊維、シチユウ、ライスカレエ

癌腫の膿汁をかけたトンカツのにはひ  
 酔つぱらつた高等遊民の群れは

田舎臭い議論を道聽途説し

獨乙派の批評家は

文壇デパートメントストアを建設しようとする

軽い胃痙攣

それでも耳にうつくしい

追分の節尺八がひびく！

カフェ、ライオンの精養軒アイスクリームを  
 激賞するアメリカ歸りの男を捉へて

その平たい四角な頬を撲り

齒に沁み通り、咽喉を焼き爛らす氷水を

脚氣衝心の患者のやうに噛みしめれば

たごへば女の贅肉をひきちぎるころよさ

色情狂のたくらみの果てしもないやうに

夜はこうこうと更け渡つても

私の魂は肉體を脅かし

私の肉體は魂を襲撃して

不思議な食欲の興奮は

みたせども、みたせども

尙ほ欲し、あへぎ、叫び、狂奔する

眼をあげれば

ベルグソンの哲學は青い表紙の中に蹲うづくまり

ヒルトの藝術生理學は無用の饒舌を誇り

好人物のモオクレエルは「我れ猶太人にあらず」

と辯解に力め

滑稽な「新譯源氏物語」は醜き唇をひるがへす

一つとして

私の飢渴を充たすに

薄荷水ほどの功德あるものも無い

むしろ吐いちまへ、吐いちまへ

そして、あぶらの臭氣のない國へ

清潔な水と麵麴とのある國へ

慈悲と不可思議解脱の領する國へ

この食慾を棄てにゆけ

夏の夜の食慾を

みたせども、みたせども

尙ほ欲し、あへぎ、叫び狂奔する此の食慾を棄て

にゆけ

あの美しい國へ、あの不斷の花のかをる國へ――

(八月十日)

## 或る夜のこころ

七月の夜の月は

見よ、ポプラアの林に熱を病めり  
かすかに漂ふシクラメンの香りは

言葉なき君が唇にすすり泣けり

森も、道も、草も、遠き街ちまたも

いはれなきかなしみにもだえて

ほのかに白き溜息を吐けり

ならびゆくわかき二人は

手を取りて黒き土を踏めり

みえざる魔神はあまき酒を傾け

地にとごろく終列車のひびきは人の運命をあ

ざわらふに似たり

魂は去のびやかに痙攣をおこし

印度更紗の帯はやや汗ばみて

拜火教徒の忍黙をつづけむとす

こころよ、こころよ

わがこころよ、めざめよ

君がこころよ、めざめよ

こはなに事を意味するならむ

断ちがたく、苦しく、のがれまほしく  
又あまく、去りがたく、堪へがたく――  
こころよ、こころよ

病の床を起き出でよ

そのアツシシユの假睡をふりすてよ

されど眼に見ゆるもの今はみな狂ほしきなり

七月の夜の月も

見よ、ポプラアの林に熱を病めり

やみがたき病よ

わがこころは温室の草の上

うつくしき毒蟲の爲にさいなまる

こころよ、こころよ

――あはれ何を呼びたまふや

今は無言の領する夜半なるものを――

(八月十八日)

## おそれ

いけない、いけない

静かにしてゐる此の水に手を觸れてはいけないな

い

まして石を投げ込んではいけません

一滴の水の微顫も

無益な千萬の波動をつひやすのだ

水の静けさを貴んで

静寂の價あたいを量らなければいけない

あなたは其のさきを私に話してはいけない

あなたの今言はうとしてゐる事は世の中の最

大危険の一つだ

口から外へ出さなければいい

出せば則ち雷火である

あなたは女だ

男のやうだと言はれても矢張女だ

あの蒼黒い空に汗ばんでゐる圓い月だ

世界を夢に導き、刹那を永遠に置きかへようと

する月だ

それでいい、それでいい  
 その夢を現うつにかへし  
 永遠を刹那にふり戻してはいけない  
 その上  
 この澄みきつた水の中へ  
 そんなあぶないものを投げ込んではいけない  
 私の心の静寂は血で買った寶である  
 あなたには解りやうのない血を犠牲にした寶  
 である

この静寂は私の生命いのちであり  
 この静寂は私の神である  
 玄かも氣むつかしい神である  
 夏の夜の食欲にさへも  
 尙ほ烈しい擾亂を惹き起すのである  
 あなたはその一點に手を觸れようとするのか  
 いけない、いけない  
 あなたは静寂の價を量らなければいけない  
 さもなければ  
 非常な覺悟をしてかからなければいけない

その一個の石の起す波動は  
 あなたを襲つてあなたをその渦中に捲き込む  
 かも知れない  
 百千倍の打撃をあなたに與へるかも知れない  
 あなたは女だ  
 これに堪へられるだけの力を作らなければい  
 けない  
 それが出来ようか  
 あなたは其のさきを私に話してはいけない  
 いけない、いけない

御覽なさい

煤烟と油じみの停車場も  
 今は此の月と少し暑くるしい霧との中に  
 何か偉大な美を包んでゐる寶藏のやうに見え  
 るではないか  
 あの青と赤とのシグナルの明りは  
 無言と送目との間に絶大な役目を果たし  
 はるかに月夜の情調に歌をあはせてゐる  
 私は今何かに圍まれてゐる  
 或る雰圍氣に  
 或る不思議な調節を司る無形な力に



をして最も貴重な平衡を得てゐる  
 私の魂は永遠をおもひ  
 私の肉眼は萬物に無限の價値を見る  
 まづかに、まづかに  
 私は今或る力に絶えず觸れながら  
 言葉を忘れてゐる

いけない、いけない

静かにしてゐる此の水に手を觸れてはいけないな  
 い

まして石を投げ込んではいけない

## 犬吠の太郎

太郎、太郎

犬吠いぬがへの太郎、馬鹿の太郎

けふも海が鳴つてゐる  
 娘曲馬のびらを擔いで  
 プリキの鐘を棒千切で  
 ステレレカンカンとお前がたたけば  
 様子のいいお前がたたけば

海の波がごうと鳴つて齒をむき出すよ

ね

今日も鳴つてゐる、海が――

あの曲馬のお染さんは

あの海の波へ乗つて

あの海のさきのさきの方へ

どつくの昔いつちまつた

「こんな苦鹽じみた銚子は大きらひ

太郎さんもおさらばつて

お前と海とはその時からの

あの暴風の晩、曲馬の山師の夜逃げした、あの時

からの仲たがひさね

ね、そら

けふも鳴つてゐる、齒をむき出して

お前をおごかすつもりで

淺はかな海がね

太郎太郎

犬吠の太郎、馬鹿の太郎

さうだ、さうだ

もつとたたけ、ブリキの鑊を  
ステレレカンカんと  
そして其のいい様子を  
海の向うのお染さんに見せてやれ

いくら鳴つても海は海  
お前の足もとへも届くんぢやない  
いくら大きくつても海は海  
お前は何てつても口がきける  
いくら青くつても、いくら強くつても  
海はやつぱり海だもの

お前の方が勝つだらうよ  
勝つだらうよ

太郎、太郎

犬吠の太郎、馬鹿の太郎

海に負けずに、ブリキの鑊を  
玄つかりたたいた  
ステレレカンカんと  
それやれステレレカンカんと――

## さびしきみち

かぎりなくさびしけれども

われは

すぎこしみちをすてて

まことにこよなきちからのみちをすてて

いまだまらざるつちをふみ

かなしくもすすむなり

—そはわがこころのおきてにして

またわがこころのよろこびのいづみなれば

わがめにみゆるものみなくしくして

わがてにふるるものみなたへがたくいたし

されどきのふはあぢきなくもすがたをかくし

かつてありしわれはいつしかにきえさりたり

くしくしてあやしけれど

またいたくしてなやましけれど

わがこころにうつるもの

いまはこのほかになければ

これこそはわがあたりしきちからならめ

かぎりなくさびしけれど  
われはただひたすらにこれをおもふ

—そはわがこころのさけびにして  
またわがこころのなぐさめのいづみなれば

みまらぬわれのかなしく  
あたらしきみちはまろみわたれり  
さびしきはひとのよのことにして  
かなしきはたましひのふるさと  
こころよわがこころよ

ものおちするわがこころよ  
おのれのすがたこそすゐちなれ  
さびしさにわうごんのひびきをきき  
かなしさにあまきもつやぐのほひをあぢは  
へかし

—そはわがこころのちははにして  
またわがこころのちからのいづみなれば

(十月八日)

## カフエにて

泥でこさへたライオンが  
 お禮申すとほえてゐる  
 肉でこさへたたましひが  
 人こひしいと飲んでゐる

(——)

## 梟の族

—聞いたか、聞いたか  
 ぼろすけぼうぼう—

軽くして責なき人の口の端  
 森のくらやみに住む梟たぐろの黒き毒に染みたるこ  
 る

街ちまたと木き木きとにひびき  
 わが耳を襲ひて堪へがたし

わが耳は夜陰に痛みて  
 心にうつる君が影像を悲しみ窺ふ  
 かくして責なきは  
 あしき鳥の性なり

—きいたか、きいたか  
 ぼろすけぼうぼう—

おのが聲のかしましき反響によるこび  
 友より友に傳説をつたへてほこる  
 梟の族、あしきともがら

われは彼等よりも強しとおもへど

彼等はわれよりも多辯にして

暗示に富みたる眼と、物を藏する言語とを有せ  
 り

さればかくして責なき

その聲のひびきのなやましさよ

聞くに堪へざる俗調は

君とわれとの心を取りて不倫と滑稽との境に  
 擬せむとす

のろはれたるもの

梟の族、あしきともがらよ

されどわが心を狂ほしむるは  
むしろかかるおろかしきなやましさなり  
聲は又も来る、又も来る

—きいたか、きいたか  
ぼろすけぼうぼう—

(十月二十日)

冬が来る

冬が来る

寒い、鋭い、強い、透明な冬が来る

はら、又ろろんとひびいた

連發銃の音

泣いても泣いても張がある  
つめたい夜明の霜のころ



不思議な生をつくづくと考へれば  
ふと角兵衛が逆立ちをする

私達の愛を愛といつてしまふのは止さう  
も少し修道的でも少し自由だ

冬が来る、冬が来る  
魂をどごろかして、あの強い、鋭い、力の権化の冬  
が来る

(十月二十三日)

カフエにて

おれの魂をつかんでくれ  
おれの有り様を見つめてくれ  
夜目遠日笠のうち  
そればつかりは眞平だ

( )

## 或る宵

瓦斯の暖爐に火が燃える  
ウウロン茶、風、細い夕月

—それだ、それだ、それが世の中だ

彼等の欲する真面目とは禮服の事だ

人工を天然に加へる事だ

直立不動の姿勢の事だ

彼等は自分等のこころを世の中のごさくさま

ぎれになくしてしまつた

曾て裸體のままであつた冷暖自知の心を—

あなたは此を見て何も不思議がる事はない

それが世の中といふものだ

心に多くの俗念を抱いて

眼前咫尺の間を見つめてゐる厭な冷酷な人間

の集りだ

それ故、眞實に生きようとする者は

—むかしから、今でも、このさきも—

却て眞摯でないと思はれる

あなたの受けたやうな迫害を受ける

卑怯な彼等は

又誠意のない彼等は

初め驚異の聲を發して我等を眺め

ありとある雜言を唄つて彼等の閑ひまな時間をつ

ぶさうとする

誠意のない彼等は事件の人間をさし置いて唯

事件の當體をいちくるばかりだ

いやしむべきは世の中だ

愧づべきは其の渦中の矮人だ

我等は爲すべき事を爲し

進むべき道を進み

自然の掟おきてを尊んで

行往坐臥我等の思ふ所と自然の定律と相戻ら

ない境地に到らなければならぬ

最善の力は自分等を信する所にのみある

蛙のやうな醜い彼等の姿に驚いてはいけない

むしろ其の姿にグロテスクの美を御覽なさい

我等はただ愛する心を味へばいい

あらゆる紛糾を破つて

自然と自由とに生きねばならない

風のふくやうに、雲の飛ぶやうに

必然の理法と、内心の要求と、叡智の暗示とに嘯

がなければいい

自然は賢明である

自然は細心である

半端物のやうな彼等のために心を悩ますのは

お止しなさい

さあ、又銀座で質素な飯でも喰ひませう

(十月二十三日)

## 夜

寒い風が吹く

私は燈火に満ちた東京の街道を歩き廻る

十月末の夜の空気は木綿の單衣を透して

肌不思議な快感をおくる

すべて虚偽のかたまりに見える

ただ現在の自分を信ずるより道がない

石を蹴ると石は飛んで川に落ちる